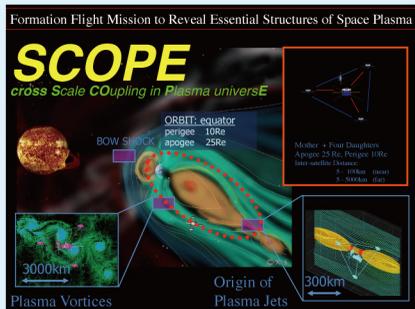


次期磁気圏観測衛星検討WG SCOPE計画 -SCOPE 衛星システム検討状況 - -SCOPE System Study Status -

○齋藤義文、津田雄一、戸田知朗、鎌田幸男、中塚潤一、藤本正樹 (ISAS/JAXA), 次期磁気圏観測衛星 WG
Y. Saito, Y. Tsuda, T. Toda, Y. Kamata, J. Nakatsuka, M. Fujimoto and SCOPE Mission Definition Team

次期磁気圏観測衛星 WG で提案した編隊飛行による磁気圏観測ミッション「SCOPE(cross Scale COupling in the Plasma universE)」の検討状況を紹介します。



SCOPEシステム検討の経緯

- 2003~ システム検討スタート
1 Mother + 4 Daughters 構成,
Launcher: M-V
- 2004~ キーとなるサブシステムの検討・開発開始
-衛星推進・姿勢制御機構
-スピニングアンテナ
-高容量 DR
-SCOPE観測機に見合ふ観測機器
- 2006~ ESA/Cross-Scale計画との共同検討・共同提案
- 2008~ JAXA-CSA 共同検討開始
- 2011~ 次期固体ロケット2機使用案、H2A使用JAXA単独案の検討開始

M-V打ち上げに対応可能な衛星構成、ミッションシナリオ検討完了。(1 Mother, 4 Daughter, 1 M-V launch)

M-Vシナリオは、H2Aおよび次期固体ロケットとの適合性検討を行い、小変更で適合性があることを確認。

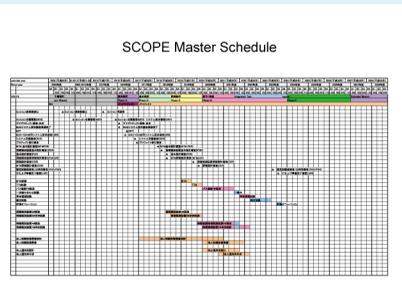
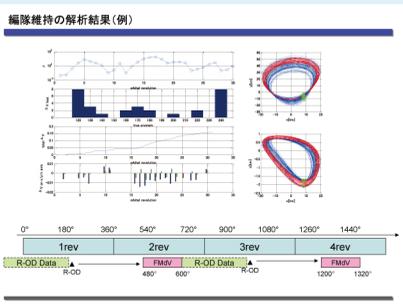
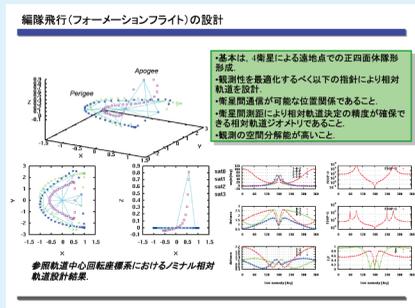
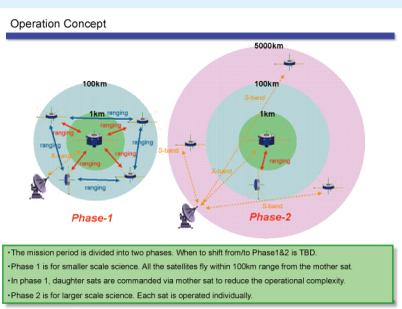
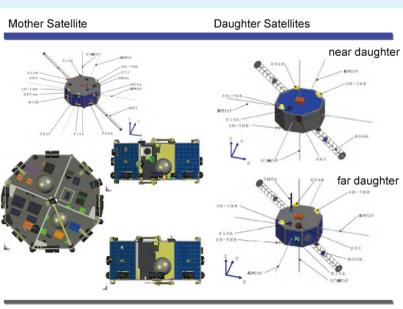
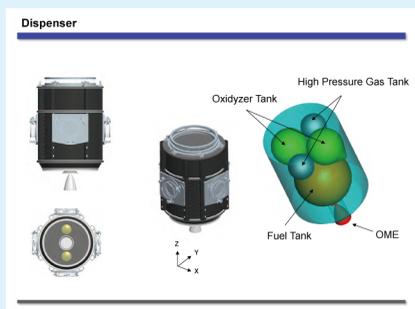
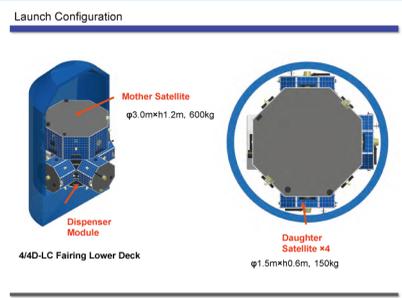
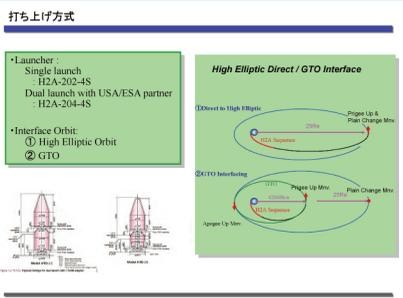
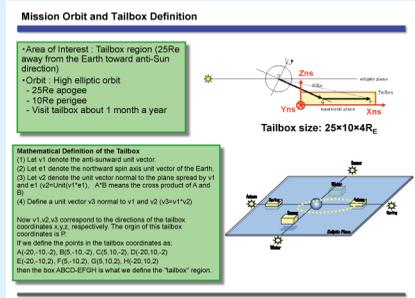
Cross-Scale計画との共同提案に合わせ、またM-V廃止に伴い、H2Aに特化した国際共同ミッションシナリオ作り替えを実施。

Cross-Scale提案がESAにおいて頓挫したことを踏まえ、JAXA-CSA (Canadian Space Agency) 共同ミッションを提案開始。

CSAとの共同ミッションが実現できなくなったため、次期固体ロケット2機使用案やH2A使用JAXA単独案等の検討を実施中。

SCOPE Spacecraft Specifications

Parameter	Mother [M]	Daughter (near) [DS]	Daughter (far) [DF]
Number	1	2	2
Weight (dry/eq)	600kg (520kg)	150kg/130kg	150kg/130kg
Propulsion system	Hydrazine 240N/mk Monopropellant (MCP) Attitude control: Mono-La 3N	Mono-La Hydrazine 200N/mk	Mono-La Hydrazine 200N/mk
Attitude stability control	Spin stabilized (0.3Hz) spin axis perpendicular to the orbit	Spin stabilized (0.2Hz) spin axis: solar pointing	Spin stabilized (0.2Hz) spin axis: perpendicular to the orbit
Communication	Uplink: X-band downlink: S-band Swathcast mission: X-GPSK inter-satellite: S-band	Uplink: X-band downlink: S-band inter-satellite: S-band	Uplink: X-band downlink: S-band inter-satellite: S-band
Deployables	Radar Boom: 3m (2.0 deployment) Radar Antenna: 30cm (0.075m/sec 1.0 deployment)	2m (2.0 deployment) 30cm (0.075m/sec 1.0 deployment)	2m (2.0 deployment) 30cm (0.075m/sec 1.0 deployment)



想定していたCSAというパートナーが不在(確認中)となった状況で開発を区切りのよいところまで継続的に実施する

世界の宇宙における立場という観点から

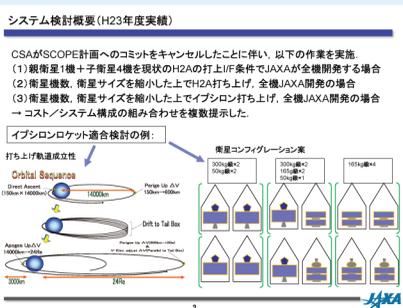
NASA-MoCにおいてSCOPEへの搭載認定観測機器の開発が提案されたこと (PVA), ESA-MoCにおいてEIDOS計画がSCOPEの進展を持つというスタートアップ

そこでは、SCOPE-WGが、世界から注目されて同時マルチスケール観測という構想そのものを世界でリードする立場にあることを示す。その立場に相応しい責任がある責任として、この先でWG活動をばらばらクローダクさせることは余儀なくされるとしても、基本的技術に関しては、当初の予定通り、SRR相対レベルまで進めてからにしたい。

技術開発という立場から

SCOPEではこれまでシステム検討に加えて、SCOPE衛星計画を実現する上で特に重要な衛星間通信・衛星システム開発 2)超高速放射線計測ハックの開発を進めてきた。特に、共同ミッションの状況次第ではカガヤクプロジェクトの提供も考えていた「観測衛星間通信(CROSS)の開発」(軽量、高剛性伸縮伸縮アンテナの開発)は編隊飛行のための必要先進的な技術要素であり、「同時マルチスケール観測」を世界でリードするために我が国での技術開発が必要である。

このうち、「観測衛星間通信(CROSS)の開発」の併走を示すと、2011年度、12年度、13年度の作業によって、搭載FGPAへ移植可能な観測衛星および子衛星の完全なS帯通信開発FGPAプログラムを、BBMを基に完成させる計画である。したがって、2012年度まで開発を継続することでSCOPE計画における観測衛星間通信の開発は一皮切り付き、時間を削いでプロトタイプ実機後の再開発も可能になる。



<もし現在の13機の能力の増強型インテグレーションがあれば>

M-Vの0.8倍程度WET 470kgを考えると
2400x X 240000km

ε 1 観1機 DRY 254kg 燃料 216kg WET 470kg
ε 2 子2機 DRY 127kgx2 燃料 108kgx2 WET 470kg
(ε 3 子2機 DRY 127kgx2 燃料 108kgx2 WET 470kg)

インテグレーションであれば全体3機構成(観1 近子1 遠子1)
子は発火元の燃定速リ(DRY 近子107kg 遠子100kg)
観はもとのDRY(382kg)の66%の重量 (ミッション機器 87.8kg * 0.66 = 58kg)

インテグレーション構成であれば全体5機構成
子は発火元の燃定速リ
観はもとの66%重量
観の一部の機能を近子に入れたらと思えば、
ε 3 子2機 DRY 120kgx1 燃料102kgx1 WET 222kg
DRY 107x20x7=134kgx1 燃料114kgx1 WET 249kg
TOTAL WET 470kg

とすると、近子衛星分の27%を観のかわりに使え、元の 281/382 = 73%の重量を確保 (ミッション機器 87.8kg * 0.73 = 64kg)